

# 模範榮譽軍人張樹義の伝記の成立と変容

丸 田 孝 志

はじめに	27
I 「栄軍旗幟」「無腿英雄」張樹義の報道と伝記	28
II 張樹義の伝記の内容の変化	40
おわりに	50

## はじめに

---

「榮譽軍人」とは、抗日戦争に参加して負傷し障害を負った軍人に対し、国家・民族のために身体を捧げ犠牲になった榮譽を讃える意図をもって、日中戦争期の1940年に国民政府が、「傷兵」という従来の呼称に替えて導入した語である<sup>(1)</sup>。近代国家の戦時総動員体制においては、全ての国民が等しく兵役、税負担などの義務を負う原則の下、国家による社会福利の整備を通じて動員が推進されるようになった<sup>(2)</sup>。傷痍軍人に対する補償の政策もその一環であるが、戦時日本では「再起奉公」、ドイツでは「労働による自立」という語に示されるように、傷痍軍人が復員後も社会に負担をかけず、むしろ模範として国家・社会に貢献することが求められた<sup>(3)</sup>。中国においても、国民政府・中共政権が各種の榮譽軍人優待条例を設けて優待を行い、戦時動員を支えようとした。深町英夫によれば、日中戦争期の国民党・国民政府は、「傷兵之友運動」と榮譽軍人政策を通じて、榮譽軍人らに精神的な慰労・顕彰と物質的な補償を行う一方で、榮譽軍人には一般民衆の模範として一層国家・民族に貢献することが求められた<sup>(4)</sup>。中共政権においても、榮譽軍人は革命のために自己を犠牲にした模範として優遇をうける一方で、模範であるが故に、更に進んで人民に奉仕することが規範として推奨されたのである<sup>(5)</sup>。

小論では、日中戦争時期の「戦闘英雄」であり、戦闘で両下肢を失いながらも、日中戦争時期から1950年代まで労働英雄・労働模範として顕彰された河北省の榮譽軍人張樹義に関する報道・伝記の変化を検討する。中華人民共和国（以下、共和国）において顕彰され

多くの榮譽軍人と異なり、張樹義は比較的長期にわたり報道や伝記が追跡でき、中共の榮譽軍人模範顕彰の意図を長期的に検証できる対象である。この作業を通じて、中共の榮譽軍人模範顕彰の特徴の一端を明らかにしたい。また、小論の最後に国家や階級闘争に捧げられた身体という張樹義の表象を、日本やソ連の傷痍軍人の物語との比較を意識して、共和国の身体観に位置づけることも試みる。

なお、共和国では榮譽軍人の呼称は法制度的には「殘廢軍人」に改められるが<sup>(6)</sup>、伝記・物語や一部の施設名などでは使用され続けた。小論では、日中戦争時期から共和国成立以降を対象とし、主に伝記を素材とするため、また叙述上の煩雑さを避けるため、原史料を直接引用する場合と法制度や施設名に言及する場合のみ殘廢軍人の語を使用し、それ以外では榮譽軍人の語を用いることとする。

## I 「榮譽軍旗幟」「無腿英雄」張樹義の報道と伝記

### 1 張樹義の経歴

まず、張樹義に関する略伝・伝記などが伝える彼の経歴・事績を簡単にまとめておく（表1）。張樹義（1906～1983）は、河北省靈寿县山門口村梁前溝莊の貧農出身の八路軍兵士で、1939年の房子山迎撃戦で日本兵数人を刺殺し、晋察冀軍区二分區「一等戦闘英雄」の称号を授与された。1940年11月、龍泉関戦闘での日本軍機の爆撃で膝から下の両足を失い、1941年4月に復員帰郷する。1943年2月には日本軍の作戦により梁前溝が無人区となったが、彼は洞窟に留まり生産を続け、遊撃隊員を派遣して敵を偵察するなどした。日本軍の撤退後は、全村5個の抜工隊（生産互助組織）を組織・指導し、1944年12月、79名の県戦闘英雄・労働模範の1人に選出された<sup>(7)</sup>。1946年1月には、冀晋区生産会（冀晋区は、晋察冀辺区の下位の行政単位）で労働英雄に選出され、「榮譽軍人的旗幟」の称号を授与されるとともに、全区で「張樹義に学ぶ運動」が展開された。

共和国の成立後、1950年9月には北京で開催された全国工農兵労働模範代表会議に参加し、国慶節前夜の宴で他の模範らとともに毛沢東に謁見し、国慶節当日にも天安門楼上で毛に謁見した。その後、河北省第一回各界人民代表会議代表、河北省政治協商會議委員などを歴任し、1952年12月には、張樹義生産合作社を成立させ、1954年8月には河北省第一回人民代表大會代表、同主席団の一員となるなどの活躍をしている。後述のように大躍進時期に出版された物語では、大躍進での活躍も指摘されているが、その後の動向については管見の限り確認できず、1980年代以降に再登場する略伝においても、晩年に榮譽復員軍人（榮譽復員軍人）光榮院に入居したという記述がある以外、言及はない。

表1 張樹義の経歴

1937年10月	八路軍115師部隊に入隊
1937年11月	小隊長に昇任
1938年4月	中国共産党に入党
1939年	房子山迎撃戦で日本兵数人を刺殺 晋察冀軍区二分区「一等戦闘英雄」の称号を授与される
1940年11月	龍泉関戦闘で日本軍機の爆撃で膝から下の両足を失う
1941年4月	復員帰郷
1943年2月～	梁前溝が無人区に 洞窟に留まり生産 遊撃隊員を派遣して敵を偵察 地雷戦を展開
1944年春	日本軍が梁前溝から撤退 全村5個の抜工隊を組織・指導
1944年12月	79名の靈寿县戦闘英雄、労働模範の1人に選出される
1945年	山門口、譚莊の両村にわたる水路を開く
1946年1月	冀晋区生産会で労働英雄に選出「栄軍的旗幟」の称号授与 全区で張樹義に学ぶ運動が展開
1949年12月	石家莊專署・石家莊市政府労働模範大会に労働英雄として参加
1950年9月～	全国工農兵労働模範代表会議に参加 主席団の一員 国慶節前夜の宴で毛沢東に謁見
1950年10月	国慶節に天安門楼上で毛沢東に謁見 河北省第一回各界人民代表會議に参加 河北省政治協商會議委員に選出
1951年2月	中国共産党河北省靈寿县第一回党代表會議に参加
1952年12月	張樹義生産合作社の成立
1954年8月	河北省第一回人民代表大會に参加 一次～七次會議の主席団（～1958年）
晩年	靈寿县栄復軍人光荣院に入居

高順古「栄軍旗幟—張樹義」『人民日報』1950年7月21日、辛毅「栄軍模範—張樹義」『人民日報』1950年9月30日、「在国慶日前夕毛主席举行盛大慶祝宴会」『人民日報』1950年10月2日、朱沢甫編著『無腿英雄張樹義的故事』広益書局、工農兵故事叢書之五十一、1952年、「栄軍旗幟—張樹義」、中共靈寿县委党史資料徵集辦公室編『靈寿先驅』法律出版社、1985年、張全慶・董振林「栄軍英雄張樹義」、中国人民政治協商會議靈寿委員會『靈寿县文史資料』第六輯、1997年、靈寿县老区建設促進委員會・『靈寿县革命老区發展史』編集委員會編『靈寿县革命老区發展史』河北人民出版社、2019年、河北省地方志編纂委員會編『河北省志』人民代表大會志、河北人民出版社、1993年などより作成。

## 2 戦後内戦期までの報道

張樹義が活動していた晋察冀辺区では、政府の成立間もない1938年4月には戦死者と栄誉軍人の補償に関する規定（「晋察冀辺区抗戦軍人傷亡撫恤辦法」）が設けられていたが<sup>(8)</sup>、1940年9月には栄誉軍人の補償に関する単行規定（「晋察冀辺区撫恤殘廢軍人辦法」、以下、

40年辦法)が制定され、補償内容が具体化した<sup>(9)</sup>。1941～1942年の反掃蕩戦により、辺区の榮譽軍人は顕著に増加し、靈寿县が属する北岳区では2,200余人から3,320人にまで増加した<sup>(10)</sup>。このような状況下、1942年6月制定の「晋察冀辺区榮譽軍人撫恤辦法」(以下、42年辦法)では、榮譽軍人を生活状況に応じて、「帰宅あるいは自ら生計を立てる者」、「工作に参加する者」、「帰る家がないか、自ら生計を立てられない者」の三種類に区分し、「帰宅あるいは自分で生活できる者」には、一度に多額の補償金を渡して、自活を奨励する方法がとられるようになった。同辦法では、40年辦法で3年に1度とされていた榮譽軍人の検査規定を毎年の実施に改めて、等級の変更や補償の停止を行うことが規定された<sup>(11)</sup>。同年の検査で、北岳区では2,454人の榮譽軍人が1,828人となり、この内、一等・二等榮譽軍人は、575人から260人に減少して、三等榮譽軍人の割合が上昇した<sup>(12)</sup>。この時期、補償金で土地を買い、生産に励む榮譽軍人の姿が報道されている(『晋察冀日報』1942年9月24日、以下、JC42.9.24のように略記)。

張樹義は1940年に負傷し、翌年帰省しており、これはちょうど戦争の激化の中で榮譽軍人に対する補償制度が整い、同時に榮譽軍人の自助努力が求められていく時期にあたる。両下肢部分を喪失した張は、40年辦法、42年辦法では一等榮譽(殘廢)軍人に該当し、彼はこの間も民兵として活動しているが、所属機関がない地元での任務であるため、42年辦法の「帰宅あるいは自ら生計を立てる者」に該当する。40年辦法では、一等殘廢軍人は原隊と同等の待遇の他、毎月1元の小遣いを支給され、42年辦法では、毎年粟650斤を支給されることになっていた<sup>(13)</sup>。1940年、村教員の食費は、1日当たり1斤2兩、旧制として1年あたり約411斤が支給されており<sup>(14)</sup>、制度上は1年間の食用以上の充分な額が保証されていた。ただし、生産力の低い前線の農村で、軍隊すら自活のための生産に従事しなければならない状況において、これらの補償措置が規定通りに実施できたかは、検討の余地がある。

そのことを暗示するかのように、その後の一連の報道や伝記において、帰省直後の張樹義は、「決して寝たきりになって、お上(公家)に養ってもらうことはない」などと公言して、自ら生産に励んだことになっており、補償が提供されたのか、その条件が整っていなかったのか、あるいは張自身が補償を辞退したのかは明らかにされていない。唯一、後述する1953年の伝記のみが、部隊から地方政府宛に張樹義の世話を依頼する手紙を張が村長に手渡したことを叙述しているが<sup>(15)</sup>、いずれにしても、これら共和国において描かれた伝記は補償を彼の当然の権利や党の恩恵として示すことはなく、彼の自力更正の精神を顕彰することに終始している。なお、改革開放後の略伝においては、一旦彼に義足が支給されていたことが明らかにされており、何等かの支援が行われていたことがわかる<sup>(16)</sup>。

張樹義は、1944年12月に靈寿县で労働模範として表彰されているが、同月に開かれた晋察冀辺区第2回群英大会では、康福山、陳玉華の二人の民兵が「栄誉軍人、退役軍人の大旗」として表彰されていた(JC45.3.4)。康福山は、足の三カ所を負傷して退役しており<sup>(17)</sup>、陳玉華の負傷の程度は不明であるが、『晋察冀日報』の記事では彼らの障害や身体について特に言及しておらず、彼らが本来救済の対象でありながらも、「民衆に奉仕する」主体として活躍していることが叙述されている。このように、既に日中戦争末期から、栄誉軍人が復員後も農村において、自己犠牲を重ねて民衆に奉仕することが模範を通じて提唱されるようになっていた。

ただし、この大会で張樹義は辺区級の英雄に選ばれていない。両脚を失った抗日英雄が無人数の過酷な環境の中で生き残っていたこと自体が奇跡的で感動的なことであり、このことが誇張・美化されて宣伝に利用されたもので、彼の事績の多くが虚構であったということも考えられなくはない。また、群英大会の顕彰の重点が栄誉軍人よりも復員軍人の顕彰にあった可能性も否定できない。いずれにせよ、戦時において彼のような重度の栄誉軍人が、外地に赴くのは極めて危険であり、大会に参加できる条件はなかったであろう。また、戦時において戦争の不条理が刻まれた栄誉軍人の身体は、容易に人々の戦争の恐怖と拒絶の感情を引き起こす恐れがあり、重度の栄誉軍人を模範として称揚することは、むしろ戦況の厳しさ、政府の補償能力や補償の意志の薄弱さを印象づけることにもなりかねない。この時期、国民政府統治地区においても、栄誉軍人に対する社会の強い偏見、栄誉軍人と社会の様々な摩擦が確認されており、現実においては中共根拠地も含めて、栄誉軍人の活躍、貢献よりも、その救済と社会との摩擦回避の施策が優先されていたものと考えられる。

日中戦争が終結し、中共と国民党との間に双十協定が結ばれて停戦が実現した後の1946年1月、冀晋区生産会において労働英雄に選出されたことを契機に、張樹義の名前は辺区レベルで知られるようになる。停戦後の生産建設が主題となった同大会において、張は「栄誉軍人的旗幟」としてその事績が顕彰された。大会の報道では、王政治委員自ら彼の両脚の棉を替えてやる、両脚の代わりとして、また生産を助けるために驢馬を与える、区党委の王昭が自ら水を接ぎ、韓専員が自分の皮のコートをかけてやる、科長達が「しっかり食べたか、寒くないか」と声をかけるなどの叙述が見られ(JC46.2.1, 2.11, 2.13)<sup>(18)</sup>、彼の身体に関心をよせる指導者の姿勢が強調されている。大会における区党委の決定では、各級指導機関が「民衆観点」を深く検査し、特に栄誉軍人・退役軍人に関心を持って、大生産運動中に彼らが家業を建て、その生活を改善することを呼びかけた(JC46.2.1)。張自身も「私は今後更に党のために仕事をし、人民に奉仕する」(JC46.2.1)、「父親のいない孤児や寡

婦、幹部・兵士・烈士の家族、民衆に奉仕する」(JC46.2.11)と弱者救済の誓いを述べた。報道の重点は困難を克服する張の自力更生の精神と榮譽軍人への関心に置かれているように見え、後の伝記が叙述する彼の主要な功績である水路建設の事績には触れられていない。

この大会で提唱された「張樹義に学ぶ運動」においては、榮譽軍人・退役軍人が張の精神に学び、救済に頼る考えを克服し、自ら家業を建て民衆を団結させ、組織し、民衆を指導する核心となることなどが呼びかけられた(JC46.2.1)。戦後の厳しい環境において、榮譽軍人・退役軍人の自助努力を強調する他、復員後の基層社会での指導的役割が期待されており、ここには復員軍人を農業集団化の推進に動員していった1950年代の復員工作の論理が既に確認できる<sup>(19)</sup>。

なお、冀中区の1944年の総収入は約3億8,367万斤で、同年の軍人家族優待糧は2,300万斤、榮譽軍人約1,000人に一人当たり年間1,000斤、計100万斤の撫卹糧が支給され、これに死亡見舞金・棺材費160万斤を足すと、これら兵役負担者に対する補償の総額は2,560万斤に上り、総収入の9.3%を占めていた<sup>(20)</sup>。兵役負担者の救済は財政的にも重たい課題となっており、復員者自身の自助努力と模範的な働きを通じて、その救済が目指されていたと言えよう。

1949年12月、張樹義は石家莊専署・石家莊市政府労働模範大会に参加しているが、『河北日報』は同時開催の展覧会の報道を先行させ、その内容も技術に対する関心に集中しており、大会の報道が張に言及することはなかった(『河北日報』1949年12月30日、以下、HR49.12.30のように略、HR50.1.7)<sup>(21)</sup>。翌年1月の河北省経済会議にも労働英雄・生産模範8人が招待されたが、張はその中に含まれていない(HR50.1.7, 1.14, 1.15)。後に張樹義とともに全国工農兵労働模範代表会議に参加することとなる深県大護駕荘の労働英雄高貫斗は、張とは対照的に河北省経済会議に招待された上、その功績が『河北日報』において同月の内に二度にわたり報道されている(HR50.1.9, 1.15)。また、『人民日報』においても1948年9月と1950年4月に彼の功績が報道されている(『人民日報』1948年9月17日、以下、RR48.9.17のように略、RR50.4.27)。これらの状況から見るならば、共和国成立前後の労働模範の顕彰において、張のような榮譽軍人には十分な関心が払われていなかったと考えることができよう。一方で1948年8月の政府報告によれば、3年来の晋察冀辺区の榮譽軍人は3万5千人に上っていた<sup>(22)</sup>。再び張樹義の身体に関心が集まるのは、1950年7月の復員工作開始以後のこととなる。

### 3 全国工農兵労働模範代表会議出席を巡る報道と伝記

1950年8月、張樹義は全国工農兵労働模範代表会議の代表に選出され、9月の同会議の前後には、『人民日報』、『光明日報』、『河北日報』において、張に関するいくつかの報道が確認できる。この内、『人民日報』の以下の二篇の記事が張樹義の半生を記す略伝となっている。

- ・高順古「栄軍旗幟—張樹義」RR50.7.21（以下、高著）
- ・辛毅「栄軍模範—張樹義」RR50.9.30（以下、辛著）

辛毅は、日中戦争期の『晋察冀日報』に「行唐北莊の児童」という記事を投稿しており（JC44.4.4）、現地の記者ないし文学関係者であったと考えられる。更に高著・辛著の内容に1950年の生産運動の状況などを加筆した2冊の伝記が刊行されている。

- ・全国工農兵労働模範代表会議秘書処編『栄軍旗幟労働模範張樹義』、1950年（以下、秘書処編）
- ・朱沢甫編著『無腿英雄張樹義的故事』広益書局、工農兵故事叢書之五十一、1952年（以下、朱編著）

後者は朱沢甫編著となっているが、内容に関して朱自身の加筆はなく、若干の字句の修正があるのみで、張樹義伝の他、栄誉軍人など他の模範2名の伝記も収録している。朱は同叢書全82冊の全ての「編著者」であり、その仕事は実際には監修であったと考えられる<sup>(23)</sup>。

全国工農兵労働模範代表会議の開催は、国内での反革命肅清の継続に加えて、1950年6月の朝鮮戦争勃発、同年10月の義勇軍派遣の決定により戦時動員体制が再編されようとする時期にあたる。また、同年7月からは復員工作が開始され、当初は高齢者や病弱者、障害者を中心に主に農村への復員が始まっていた<sup>(24)</sup>。この時期の復員軍人は、「民衆を殴り罵らない」、「土匪にならない」といった誓約を行っており<sup>(25)</sup>、雑多な成員が社会に負担をかけず、生産に励み、更に模範となることが期待されていた。1958年までで栄誉軍人72万人を含む約620万人の復員・転業軍人を社会に定着させることは、政権にとって大きな負担となっていた<sup>(26)</sup>。このような状況下、張樹義のような重度の栄誉軍人を全国レベルの大会で労働模範として顕彰することは、傷痍軍人への偏見・差別を取り除き、栄誉軍人らを社会に定着させる上でも重要な意味をもった。張樹義の物語は復員工作の教育の教材に使用され、軍人らの自覚を高める上で効果を上げている<sup>(27)</sup>。会議の期間中、彼が国慶前夜の宴会や国慶節の天安門楼上で毛沢東に謁見したことは、栄誉軍人模範の権威を最大限に高める効果的な演出であった。「人民の偉大な領袖」との面会を通じて、張樹義の身体は党と人民に捧げられたものであることが、改めて確認されたのである。

張樹義は1950年12月制定の「革命残廢軍人優待撫恤暫行条例」の規定においても一等残廢軍人に該当するが、この規程ではより重度の「特等残廢軍人」の等級が設定されていた。張には戦闘による負傷で復員した場合の条項が適用されるので、毎年残廢金食糧200斤と撫恤糧1,000斤が生涯支給されることになっており、手厚い補償が規定されている。一等残廢軍人も、四肢の内二本の部分喪失、両目失明などを含む相当重篤な障害者であるが、在職者の補償に対する規定も設けられている<sup>(28)</sup>。これと「高齢、虚弱、障害で部隊で仕事ができず、転業にも向かず、帰るべき家があり、生活に保障があり、自ら要求する者は、軍あるいは軍分区の審査により復員を許可する」、「特等、一等障害および帰るべき家がなく、継続して工作、転業できない者は、省人民政府が榮軍教養院に収容し、生涯扶養する」という復員転業工作の方針<sup>(29)</sup>とを合わせ考えれば、一等残廢軍人は、それぞれの条件と事情に合わせて、部隊での継続勤務、転業、復員、教養院での生活の4通りの道が準備されたことになる（特等残廢軍人には、在職者の補償規定がないので、復員、教養院での生活の2通りになる）。

ただし、実施の過程で一部で重症者・精神病者が強制的に復員させられたり<sup>(30)</sup>、革命残廢軍人学校、教養院からも復員転業工作が行われて不満を引き起こしており、これら院校からの復員転業工作が一時中止に追い込まれたように<sup>(31)</sup>、復員転業工作が当事者の意思を十分に尊重せず、その福利厚生よりも、軍隊の組織運営の都合で強行された側面があったことも否定できない。また、1954年10月発布の内務部「復員建設軍人安置暫行辦法」では、復員軍人の内、「個別に病気を抱えて帰郷し、主要労働に従事できず、家にその他の労働力のない者は、彼らの家族が代耕を享受する」と規定されているので<sup>(32)</sup>、一等残廢軍人についても、土地の耕作は原則、本人と家族の責任に委ねられ、それが不可能な場合には、代耕を受けることになっていたと考えられる。その後、労働農業集団化の過程の中で制定された優待労働日の制度においては、一等残廢軍人には労働日（自身が稼働できる日数）を設定しないことが指示されており<sup>(33)</sup>、政府が公式にはこれらの人々の労働力を認めていないことがわかる。この措置は、現実には一等残廢軍人に労働日が設定されていた状況に対応したものであるが、いずれにしても、党と政府は一貫して榮譽軍人の内、労働力のある者を可能な限り生産に動員しようとしており、そのような方針が張樹義のような一等残廢軍人の模範としての奨励にも現れている。このように、現実にはほぼ労働力を失った一等残廢軍人を模範として奨励することには、深刻な自己矛盾が存在していたが、農業集団化運動の急進化とともに、そのような模範が輩出されていくことになる。

全国工農兵労働模範代表会議を巡る報道・伝記が顕彰したのは、抗日の英雄・榮譽軍人・労働模範としての張樹義の事績であった。また、会議においては、冀晋区生産会で確認さ

れたような、張樹義の身体を労わる指導者の姿は一切報道されていない。『河北日報』では、「中央人民政府が二千余斤の粟を使ってつけてくれた」義足について、張が言及する報道（HR50.10.9）が、『光明日報』では、学校での講演の際に、民衆が張に対して「座ってください」と連呼したという報道（GM50.10.8）があり、これらが僅かに身体への配慮を伝えている。救済の対象としての栄誉軍人の身体の写真は後退し、自己犠牲の主体の身体としての描写がより強く現れている。報道では、障害を負っても人民のために「全てを捧げて」解放事業に貢献した張の姿が「高度な革命の情熱と革命的楽観主義」として称賛された（GM50.10.25）。こうして、栄誉軍人は引き続き革命に貢献することによってこそ尊重されるという構図が定着しつつあった。一方、伝記における張の身体の写真は、指導者の彼への関心としてではなく、以下のような闘争の困難さと自己犠牲の凄まじさの文脈で語られることとなる。

膝に縛りつけられた二寸の厚さの靴底でつくられたあて物は、重たく脚に取り付いていた（朱編著5 以下、（ ）内の数字は、頁数を示す）。

早魃のため、彼は30斤の容量の水桶を首にかけ、一回ずつ（山を）這い上って耕作した（朱編著7、（ ）は筆者）。

この時期の報道と伝記は、その後も基調となる彼の党と人民への忠誠心を強調しているが、張樹義が所属した村の党支部などの具体的な様子については全く触れられない。また、家族については、略伝・伝記・報道では冒頭で大まかな家族構成が述べられるだけで、以後は、一人の甥とともに八路軍に入隊したこと、無人区の闘争と全国工農兵労働模範代表会議への出発に際して兄嫁が一人で世話をしたり、気遣いをする様子が触れられ、抜工隊に甥が参加していることが語られる程度である。

#### 4 過渡期の総路線時代の伝記

朝鮮戦争停戦後、復員工作が本格化し、1953年12月時点で復員転業軍人200余万人の内、60万人が栄誉軍人であったとされる<sup>(34)</sup>。1954年には、残廢軍人学校・残廢軍人教養院に8万人余りが収容されており<sup>(35)</sup>、経済部門武装・鉄道兵団にも栄誉軍人が働いていた<sup>(36)</sup>。1958年時点で全国には、等級最下位の三等乙級残廢軍人（言語障害、重大な聴覚障害、手足指の一部損傷など）30万人を含む72万人に上る栄誉軍人がいたとされる<sup>(37)</sup>。

過渡期の総路線が提起された1953年と翌年には、新たな書き下ろしの以下の2編の伝記が刊行されている。

- ・ 羨智編著『栄軍旗幟 張樹義』大衆美術社、1953年（以下、羨智編著）
- ・ 張克夫「栄軍的旗幟」、同著『英雄的老人』、東北人民出版社、1953年に収録（以下、張著）

前者は尚羨智・張樹徳・劉端など、1950年代に著名な連環画家として活躍した作家らの手になる連環画で、編著者の羨智は尚羨智のことと考えられる。尚羨智（1932～）は河北省保定市出身で、1950年代に多くの連環画作品と戯劇の台本作成に従事し、華北美術出版社の編集、河北省文聯委員、連環画研究会常務理事、省劇協副主席、国家一級編劇などの職務を務めた河北文芸界の代表的な幹部の一人であった<sup>(38)</sup>。連環画という形式は、子供向けというよりも、当時の民衆の識字水準から見れば、一般大衆向けの普及版という意味もあったと考えられ<sup>(39)</sup>、刊行部数も1万5,000冊と多い（張著は1万1,105部、後述の孟著は3,700部）。後記では目下の促成識字運動に呼応して、促成識字班の同志らが読みやすいように難しい字に注印符号を付すなどの工夫をしたと書いてある。

内容については、朱編著までで記載のなかった、1952年の生産合作社の成立、朝鮮戦争への支援についても言及している。農業集団化の進展にともない、伝記の内容は更に政治性を強調するものとなり、抗日の英雄・生産模範のイメージに加えて、地主と国民党による階級的圧迫に関する叙述がやや具体的になっている（3～9）。後記によれば、同書の初稿は石家荘地委宣伝部と靈寿県委宣伝部の審査を受け、張樹義本人にも読み聞かせたという。ただし、皆素晴らしいというだけで、特に具体的な意見は出さなかったとされる。写実的で躍動感のある挿絵が高く評価されたことは想像に難くないが、中央レベルで認定された事績をほぼなぞった形の物語に対して、地方レベルで敢えて口を挟むこともなかったということかもしれない。張自身もまた自身の経歴を解釈する権利を持っていないことは言うまでもない。

前言の後、物語の前の頁には模範として合作社を運営し、農業集団化を牽引する張樹義の決意が彼の自書によって掲げられている。朝鮮戦争の停戦が実現して復員工作が本格化し、榮譽軍人を含む復員軍人の農業集団化における指導的役割が更に期待される時期に、全国レベルの榮譽軍人模範の一人として張もまた集団化を牽引する決意を表明していた。

張者の著者張克夫は、晋察冀辺区の詩歌運動に参加し<sup>(40)</sup>、『晋察冀日報』に「毛主席回延安」という詩を発表した人物（JC46.2.10）で、地元で活躍した文芸工作者であったと考えられる。張著の内容は、冀晋区生産会までであるが、朱編著（6,000字）よりも紙幅が3倍ほど多く（18,000字）、情報が豊富で、張や甥の所属部隊、村内や近辺の地名、家族構成やその消息、無人区闘争における三つの山の位置関係などが明らかにされ、細かな取材によって、物語に具体性を持たせる工夫がなされている。生い立ちからその主要事蹟を紹介

する点において伝記の条件を満たしているが、復員の場面から筆を起こして、回想の形式で少年時代や戦闘での功績を振り返り、特に前半部分において心理描写や情景描写が細やかであるところなど、彼の伝記の中では、管見の限り小説として最も完成度の高いものになっている。

張著では、張樹義の幼少時代から青年期までの貧困生活についても、詳しく紹介されており、その中で地主の搾取についても語られる。

また、復員の事実だけを指摘するこれまでの伝記とは異なり、張著では復員時の傷ついた身体に対する細やかな描写が行われている。張は担架に担がれて村に戻り、母親が被せてあった綿入れを捲って、両脚が失われていたのを見て、兄嫁や周囲の者とともに涙を流し、皆で彼をそっと炕に抱え上げている。「あの時、行くというのを誰も止められやせんかった。叔父と甥が家を出て何年も経ち、下の方は手紙も寄越さず、上の方はこの有様で」、「これからどうやって生活しようというんだい！」という母親の嘆きも真実に迫り、総じて栄誉軍人本人と家族の悲哀が率直に描き出されている（15～17）。

張著も張樹義の英雄的な活躍を十分に紹介しているが、冀晋区生産会においても、張が台の前まで這って行き、王昭が彼を支えて椅子に座らせたこと、王政治委員が驃馬を送って張樹義同志を迎えに行かせたこと、王自ら張の膝の綿を替えてやったことなど、内戦期における『晋察冀日報』の報道と同様、彼の身体に関心を寄せる叙述がなされている。冀晋区生産会については、村人に状元と讃えられ、毛主席像の前に並ぶなどの精神的な顕彰の他に、立派な宿舎、食事やたばこ、酒のもてなしなど、物質的な歓待も丁寧に叙述され、模範の貢献に対する恩恵が強調されている点も、張著独自の特徴である（42～46）。もてなしを受けた張の独白が、以下のように記されている。

私は革命にさほどの貢献をしていないが、革命は私にこのようによくしてくれる。  
私張樹義は、これからもっと頑張らなければ（43）。

革命の恩恵が具体的に述べられた上で、自己犠牲に徹する張の決意が表明されたことで、超人的な自己犠牲のみを叙述する他の伝記に比べて、張著の叙述はより現実味を帯びたものになっている。内戦の混乱から社会経済が秩序を取り戻し、朝鮮戦争の停戦が実現する一方で、農業集団化運動が本格化する以前、また文芸界においては胡風批判が展開する直前において、張著はリアリティを一定程度重視し、そのリアリティに基づいて、文学的な味わいを生み出す作品を生み出すことができたといえる。

## 5 大躍進時期の伝記

大躍進時期の1959年には、75,000字の長編伝記が刊行された。

・孟敏『栄軍旗幟 張樹義』（河北人民出版社、1959年（以下、孟著）

著者の孟敏（1933～）は、河北省鹿泉市出身で、石家荘日報社の文芸編集・記者、『河北文芸』の編集などを担当した地元の文芸工作者で、1959年には、大躍進時期の全国における烈士・軍人家族、復員軍人、栄誉軍人らの超人的な模範事績を収集した『光栄的事業 光栄的人們』第一輯、第二輯（人民出版社）も刊行している<sup>(41)</sup>。同書は全国各地の模範事例の紹介であるため、孟自身のオリジナルな取材はほほないものと考えられるが、孟著については、その「後記」で、著者が張樹義を何度か訪問したと説明している。

孟著は張著と同じく冀晋区生産会（孟著では「晋察冀辺区英模大会」）までを対象としているが、その内容は党の指導に忠実な党員の階級闘争の物語に大きく改編されている。物語は地主に圧迫を受ける張の家族が、党の指導の下、地主への復讐を遂げるというもので、日中戦争の描写においても、事実上の敵は日本と結託する地主・国民党となっている。こうして当初の伝記では希薄であった家族、階級闘争、党組織という3つの要素が全面に押し出されることとなった。長編であるため、細かな事実に関する叙述の一部は改革開放後に復活した略伝においても参照されている。

孟著における身体に対する描写は、辛著や朱編著などと同様に自己犠牲の凄まじさの文脈で現れ、長編であるため、その叙述も具体的で豊富である。復員直後、痛みに耐え、喘ぎ、大汗をかきながら、爬行の練習をする様子（43）、民衆を組織して、山に登り木の枝を集めた際、荊で手を刺して鮮血を流しながらも這って山に分け入り続ける様子（52～53）などが描かれる。

孟著のもう一つの特徴は、後述のように、これまで言及がなかったソ連の労働模範の物語が、張樹義の模範としての人生を決定づける重要な役割を担っていることである。中ソ対立が水面下で進行していたが、ソ連に学び社会主義建設を進める一貫した方針に従い、模範の物語をより「模範的」に加工する工夫がなされたものと考えられる。後記では、張がその後、3つの貯水池建設、山の緑化、互助組・農業社の組織に従事した他、大躍進期に三八婦女貯水池建設を指導したことが簡潔に記されている。

## 6 改革開放以後の伝記の復活

1960年代から70年代にかけて、管見の限り張樹義の伝記は確認できない。余敏玲によれば、当時の労働模範らの多くは自らを取り立てた党委員会に忠実であったため、党委員会が力を失ったことで文化大革命時期に迫害を受けたとされ<sup>(42)</sup>、彭徳懐、聶榮臻などの旧華

北根拠地の指導者が批判される中、張樹義も政治闘争に巻き込まれた可能性も否定できない。後述のように孟著では、張樹義は彭徳懐から奨励を受けたことになっている。

改革開放以後、管見の限り、まず1980年代から靈寿县の党史、地方志の編纂作業において、以下のように地元の英雄・模範の1人として張の略伝が作成されている。

- ・「栄軍旗幟—張樹義」、中共靈寿县党史資料徵集辦公室編『靈寿先駆』法律出版社、1985年（以下、『先駆』）
- ・「張樹義」、靈寿县地方志編纂委員會編『靈寿县志』新華出版社、1993年（以下、『県志』）
- ・張全慶・董振林「栄軍英雄張樹義」、中国人民政治協商會議靈寿委員会『靈寿县文史資料』第六輯、1997年（以下、張・董著）
- ・「張樹義」、靈寿县老区建設促進委員會・『靈寿县革命老区發展史』編集委員會編『靈寿县革命老区發展史』河北人民出版社、2019年（以下、『老区』）

これにやや遅れて21世紀に入って以降、全国的な英雄・模範の略伝集において、彼の項目が立てられるようになっている。

- ・黄濤・史立成・毛国強編著『中国共産党抗日英雄伝』解放軍出版社、2005年（以下、黄等編著）
- ・魯傑主編『解放軍英雄故事』（中）1937-1949、四川人民出版社、2012年（以下、魯編著）。

この他、以下の略伝が確認できる。

- ・楊麗萍「栄軍英雄張樹義一次漂亮的地雷戦」（左祿主編『晋察冀軍区民兵闘争史叢書之二 地雷戦』長征出版社、1997年、以下、楊著）
- ・劉巧雲・張俊朴編著『張姓歴代名人』（下）（世界文明出版社、2004年、以下、劉・張編著）

前者は晋察冀辺区の歴史編纂に関して張樹義の地雷戦を回想したもので、後者は革命の文脈から離れた著名人の略伝集で、同書最後の「張姓残疾名人」の分類で張の事績が紹介されている。いずれにしても、1950年代のような単行本は刊行されていない。

これらに示される張樹義のイメージは、おおよそ1950年代初期のものにもどり、孟著の主題であった階級闘争については、子供時代の地主による圧迫について触れられるに留まり、家族や党組織についてはほぼ言及されなくなっている。また、1950年代の伝記が同時代の農業集団化を推進する役目を担っていたのに対して、大躍進の失敗、人民公社の解体を経て、農業集団化が権力の正当性を説明する材料とならなくなったこの時期の伝記は、1950年代の張の集団化に関する業績にも触れられず、1960年代以降についても叙述がな

い。また、県レベルの略伝には内容に明らかな誤りが散見される一方で、張・董著が県人民武装部の史料提供を受けているように、若干の事実発掘の努力が窺える。また、自己犠牲の身体描写は具体的になり、義足での歩行に苦しむ、首にかけた水桶の縄が血に染まる、ズボンと膝が泥に塗れ、荊で服が裂け、岩角で手腕を傷つけるなど、むしろ1950年代の伝記よりも強調されている（『先駆』37、張・董著94～96）。

また、1950年代から現代に至るまでのいずれの伝記も、省人民代表会議、省人民代表大会主席団などの彼の経験した代議機関の役職には触れていない。『人民日報』では1954年に憲法を議論した河北省人民代表会議で、張が「自分の両脚は幸福な明日のために失ったのだ」と発言したことを伝えるのみである（RR54.8.25）。党の指導的地位に比べて、代議機関の役割自体が軽視され、現実には権限がなかったこと、張の地位も形式的な名誉職に止まっていたことが理由であろう。

## II 張樹義の伝記の内容の変化

以下では、張樹義の伝記の叙述の変化を項目を立てて確認し、その意義について考えたい。

### 1 地主の搾取と階級闘争

#### 【地主の圧迫】

朱沢甫編著までは、地主の搾取の描写は簡便であり、おおよそ以下の説明に尽きる。

張樹義は貧困な家庭に生まれた。一家は十数人で、地主周老勤の土地を小作して生活していた。一年苦勞して働いて得た収入は、地主に四石二斗の小作料を支払う以外、残りは少しの瓜と野菜で、半年の食用にも足らなかった。民国十六年に旱魃に遭い、食糧が獲れなかったが、地主は小作料を強要し、陰曆の冬に一家の大人と子供皆が五間の藁葺きの家から追い出された。張樹義は涙ながらに家ごとに物乞いをした。こうして雪風の中でひと冬を過ごした（辛著）。

羨智編著では、上のエピソードと共に地主の残酷な性格、贅沢な生活などがやや具体的に叙述される（3～4）。張著では、貧農の一家の生活苦が比較的詳しく語られる。父が地主の厳しい搾取に晒されていたこと、張は7歳で牛飼いを始め、12歳で地主の家で牛飼いをしたこと、1927年の旱魃と長雨による不作で小作料を払えず、家族共々家を追い出され

て掘立て小屋に住み、物乞いをしたこと、東岔頭で16畝の土地を小作するようになったが、苦勞の末、父と兄が相次いで死んだことなどである。1937年の八路軍の到来によって一家は抑圧から解放されたとされ、その後、地主の搾取も国民党による圧迫も話題にはならない(18～22)。

これに対して、階級闘争を主題とした孟著では、地主周老勤は、張樹義一家の不倶戴天の敵で、悪事の限りを尽くす残酷な「活閻王」(この世の閻魔王)として描かれる。

張著では、張樹義の父は元から小作人であったが、孟著では父の5畝の土地が周老勤に奪われたことになっており、一家4人で12畝の土地を小作し、小作料4石2斗を収めていたとする(2～4)。

なお、この叙述に従い、1949年の靈寿县の畝当たり平均糧食収量39.5kg(約6.54斗)<sup>(43)</sup>を基に計算すれば、張家の土地12畝の総収量は約7石8斗5升、総収量に占める小作料の割合は53%となる。1人が生存に必要な最低の食糧を1年1.5石として<sup>(44)</sup>、小作料を差し引いた余剰は家族2人分ほどの量である。張著に従えば、張の家族は父母と兄、張自身の他、兄嫁と甥姪4人の計9人で、小作地16畝を耕作していた。これによれば総収量約10石4斗6升となるが、それでも家族4人分の量にしかならない。父と兄が生き残れなかった過酷さが推察されるが、地主小作関係だけで彼らの生活を推察することには無理がある。当時の華北農村では農業経営規模の零細さから一般に農業だけでは生活を賄えず、規模が零細であるほど、農業外の賃労働収入などに大きく依拠する傾向があった<sup>(45)</sup>。辛著では、復員後の張樹義が棗の枝を集めて400円で売り、食糧1石に換えたという叙述があり、張一家も農作に寄らない何らかの方法で生活を維持しようとしていた可能性がある。

また、復員した張個人の生産の状況は、高著によれば、1941年に2石、43年頃に7石に達していた。辛著では、41年に2石、43年頃に粟3石、玉蜀黍3石余の、豆1石3斗となっている。生活に必要な雑穀消費を年5.3石と見積もれば<sup>(46)</sup>、晋察冀辺区の1946年生産運動の目標である「耕三余一」(3年耕作して1年分の余剰を得る)をほぼ達成できていたことになる。朱編著では耕作地は6、7畝とあるので、7石の収量とすれば上述の県の畝当たり平均収量を1.7倍上回っている。更に同編著では、1943年頃の収量は12石とされているので(7～8)、平均収量の3倍近く上回る事となる。土地あたりの収量は、地質と環境、作物の種類、連作の有無などによって大きく変動するため、収量の多い地域の模範の業績として読めば、ひどく不自然な数字とはいえないかもしれないが、この頃から既に模範の事跡に対する誇張が始まっていたことが推測される。

孟著では、旱魃の年に小作料を払えず、兄が地主に借金の形に取られ、張も地主に奪われそうになったので、一家は逃亡し、流亡の中で父親は死に臨んで、息子に報復を託して

いる。更に兄は地主に殺され、張樹義は復讐のために八路軍に入隊し、1946年の土地改革において、ようやく地主を裁判にかけて処刑し、復讐を果たす（2～23, 95～100）。

#### 【国民党の圧迫】

辛著から朱編著までは、張樹義が国民党の軍隊に「捕って河南に民夫として送られた」とのみ叙述している。羨智編著では、国民党が壮丁を捕まえ食糧を奪い、戦わずして逃亡し、張も捕まるが、民夫でなく兵隊にされ、虐待を受けて逃亡したことが記されている（6～12）。張著においては国民党に関する記述はない。孟著でも、国民党の民夫や兵隊になった経緯の記載はない。余敏玲によれば、1956年頃までは労働模範に過去の経歴や政治態度などが厳しく確認されることはなく、1950年代後半から政治問題が際立って重要になってくるという<sup>(47)</sup>。孟著が張の国民党に関する経歴を語らないのは、このような政治状況を反映したものであろう。孟著では国民党の不抵抗政策や「頑固派」の日本への投降危機についても語られ、周老勤は漢奸となって日本軍に協力している。改革開放後に刊行された張・董著では、国民党に捕って河南に民夫として送られ、国民党の略奪や民衆への圧迫、腐敗・無能を見て家族が心配になり、逃亡したと説明されている（89）。

#### 【八路軍入隊、入党の経緯】

八路軍への入隊と入党の経緯について、辛著から朱編著までは、張が河南に民夫として送られた頃、八路軍が壺寿県に入って民衆を指導して抗日、減租減息を実行しており、逃げ帰った張は家の状況が以前よりよくなっていたので、2人の甥を連れて民兵連に参加し、民兵連が正規兵団に昇格し、後に共産党に参加したと説明している。入党の時期や経緯については説明されていない。羨智編著では、華北に八路がいて、民衆を指導して減租減息と抗日を行い、人民の生活が向上していることを張は国民党軍の中で既に知っていて、河南から逃げ帰り、故郷と家の状況とが以前よりよくなっていたので、民兵に志願したと説明し、八路軍の声望が高いことが示唆されている（11～13）。入隊の経緯には触れられず、入党については言及していない。同編著では、後述のように共産党よりも毛沢東の権威が強調されている。

孟著では、張は父親と兄の仇を打つために、八路軍への入隊を目指し、共産党幹部の指示で、一人で五台山に行き入隊し、立功の後に入党を認められている。ただし、入隊の際、党の教導員に、抗日救国が現在の主要任務であることを諭されている（22）。

このようなプロットに関して、中華民国から共和国までの庶民の読書の歴史の文脈では、この時期までの武俠小説との親和性が指摘できる。武田雅哉によれば、中華民国期には武

侠小説の影響を受けた青年らが、仙術を学ぶ志を抱き師を求めて入山するという事件が起きたり、共和国成立初期には、そのような青少年の「墮落」した行動を物語にして批判する連環画が刊行されており<sup>(48)</sup>、作家はそのような当時の若者らの心を引き付けていたプロットを理解していたであろう。なお、村人は榮譽軍人ながら超人的な活躍をする張を、辛著では「神になった」、孟著では「生きた仙人」(76)と讃えている。

改革開放後に刊行された張・董著では、八路軍が太行山に入り、民衆を指導して、抗日、減租減息、合理負担を実施し、張は抗日救国の真理の宣伝に心を奪われ、甥の金山と民兵連に参加し、更に連長を尋ねて八路軍に参加して、功績を挙げて入党したと説明している。

## 2 両下肢を失う前後の言動

『人民日報』の高著では、復員後に張は「生産はやはり玄人だ。決して寝たきりになって、お上に養ってもらうことはない。この半分の間人もやはり党と人民のものだ」と語っている。同著と秘書処編は「生産はやはり玄人だ。決して寝たきりになって、お上に養ってもらうことはない」を節の題にしているが、朱編著は高著の叙述に従いながら、「この半分の間人もやはり党と人民のものだ」を題にして、イデオロギーをより強調した構成にしている。羨智編著では、張は「戦うことはできないが、耕作はできる。命さえあれば、革命をしなければならない。俺を半分の間間だと思ふなよ。俺も毛沢東についていく」と語り、党と人民が毛沢東に置き換えられている。

孟著では、両脚を切断する手術前後の状況が描かれ、張は日本と戦い、地主に復讐するため、切断を望まないが、団政治委員が両脚を失っても飛行士として活躍したソ連空軍の英雄ミレシエフ(Мересьева)の伝記『無腿飛將軍』(*Повесть о настоящем человеке* [真実の人間の物語])の話を伝えて彼を励まし、手術を受けさせる。術後、張は看護婦に『無腿飛將軍』を読み聞かせてもらい、更にオストロフスキー(Островский)の自伝的小説『鋼鉄是怎样鍊成的』(*Как закалялась сталь* [鋼はいかにして鍛えられたか])を読み聞かせられ、主人公パーベル(Павел)の「私の心臓が動いている間は、私を離党させてはならない。私の仕事を停止させることができるのは、死のみである」という言葉に感動して信念が固まる(37～38)。ただし、『無腿飛將軍』の事績の発生は1942年で、その伝記のロシア語での出版は1946年であり、『鋼鉄是怎样鍊成的』の中国語訳版が根拠地にもたらされるのは1942年で<sup>(49)</sup>、いずれも張樹義が負傷した1940年10月には間に合っていない。

『鋼鉄是怎样鍊成的』は、共和国成立前後から黨員らの革命精神涵養の代表的教材として使用されている<sup>(50)</sup>。榮譽軍人らも失意の中で同書に出会い、再起して革命事業に貢献していったとされる。これらは、全盲の山東教養院政治委員姚傑(RR48.7.18)、無脚トラクター

運転手と称された李来財<sup>(51)</sup>、右腕を失い左目を失明するなどした義勇軍兵士尤輝(RR54.8.1)など重度の障害を負った人々であり、孟著の描く張樹義のエピソードも、当時のこのようなプロットに沿って改編されたものであった。姚傑の事績は、華東榮譽軍人学校の教材として編纂されて、同校の教育に用いられており、李来財の事績も復員軍人関係の軍の教材に編纂されている。この他、1951年の全国労働模範となった兵器工の呉運鐸は、「中国のパーベル」(RR51.9.30)と称され、同書の事績を基に新たな模範が再生産されていった。そしてこれらの模範事績を学んだ軍人らが、改めて模範としての活躍を期待されていくことになる。

改革開放後の楊著(1)と張・董著(94)では、一時期の治療を受けて復員した張は、「革命には流血がつきものだ。下半分がなくなっても、まだ上半分がある」、「半分の体でも革命をやる。決して皆の足手まといになったり、お上に養ってもらうことはない」と語っている。ここには、党も人民も出てこないが、快活な性格であったとされる張の、彼なりの表現での決意が示されている。「党・人民に捧げられた身体」という表現は、『鋼鉄是怎样鍊成的』の精神に基づくものであるとともに、延安整風運動を経て「人民に奉仕する」という標語が生まれ、この概念が徹底されていくことを考えれば、実際の張の語りは、楊著、張・董著に近いものであったかもしれない。

### 3 セレモニー・象徴・指導者・肖像

#### 【冀晋区生産会】

冀晋区生産会で、張は「榮譽軍人的旗幟」の称号を区党委から与えられ、王平政治委員は彼を「栄軍的旗幟」と称して、彼にピストル、驢馬と、王がその場で外した自身のベルトを与えている(JC46.2.1, 2.12)。帰省後の張の手紙では、彼が面会した指導者らの彼に対する関心や歓待について感謝の念が綴られ、「今、八路軍共産党は我々貧乏人を主人公としてくれ」と述べられているが、既に個人崇拜が浸透しつつあった毛沢東については言及がない(JC46.2.11)。高著では「聶司令」が「栄軍旗幟—張樹義」の奨旗、ピストル、農具数点を与えたとしている。王平は中央レベルの指導者ではないため、著名で権威のある聶榮臻に替えられたのかもしれない。両脚の代わりとして与えられた驢馬が削除されているのは、身体への関心の後退とも考えられ、代わりにより能動的な身体を想起させる農具が加えられた。ベルトに言及しないのも、身体への関心が欠落することで、模範と指導者の距離が開いたことが影響していると言える。ピストルは『晋察冀日報』の記事では護身用とされているが、ここではそれに言及がないので、より能動的なイメージを想起させる。「榮譽軍人的旗幟」は簡便明快な「栄軍旗幟」に変えられ、また当時の報道では確認できない

奨旗が授与されている。辛著から朱編著までは「栄軍旗幟」の称号を与えたとのみ叙述している。

羨智編著では、「英雄」と刺繍された旗が贈られたとしているが、挿絵の旗には「栄軍旗幟」の文字が見える。張著では、贈物については基本的に当時の記事に従っているが、王昭から「栄軍的旗幟」と刺繍された旗が授与されたとしている。王平から贈られたベルトについては、ピストルを掛けるものと説明を加えている（45～46）。また張著では、「村から状元が出た」と村人に讃えられ、役畜（挿絵では馬）に乗って大会に出発する張の姿が描かれる。子供たちが「毛主席に会ったら、よろしく伝えて」と声をかけているが（42）、これは全国大会に出発する際の村人の発言を伝えた『人民日報』の報道（後述）をこの時代に引き写したものとも考えられる。

孟著では、張は1946年の晋察冀軍区の「栄軍旗幟」に評定され、「栄軍旗幟」の錦旗を授与されたとする。張の胸には赤い花がつけられ、驢馬と種蒔き車が贈られている。共和国成立後の政治状況に合わせた改編が著しく、出発前に全村民から「毛主席によろしくと伝えるのを忘れないで」と声をかけられていることその他、張は「今後互助組・農業社を運営して」、「共産主義事業に奮闘する」と発言しており（101～103）、張が当時から農業合作化運動に邁進していたことになっている。このような改編は、中共の指導する根拠地が共産主義を目指す政策によって勝利を獲得してきたというメッセージにもなっている。同著の「概要」では、「晋察冀辺区英模大会」で「彭徳懐に会った」とされ（奥付）、大会名が一般向けにわかりやすく変更され、中央レベルの指導者による権威付けが行われている。

#### 【全国工農兵労働模範代表会議】

高著と『河北日報』（HR50.9.20）では、北京へ向かう張に対して、ある村人が「よその労働模範の新しい方法をよく聞いてくれ」、「毛主席から何か指示があったらわしらに手紙をくれ」と語っているが、朱編著では、「毛主席の話を持ち帰ってわしらに聞かせてくれ」（17）となり、毛に対する村人の関心がより強く描かれている。ただし、これも飽くまで1村人の声であり、孟著が晋察冀辺区英模大会について描いたような全村民の声ではない。

#### 【毛沢東像】

高連環画である羨智編著では、毛沢東の肖像と毛に関する叙述が比較的豊富である。全105枚の絵の内、6枚に毛が描かれている（肖像が4枚、張の想像によるイメージが1枚、毛本人の登場が1枚）。1939年の白兵戦に際して、張は「毛主席、共産党、全営の兄弟のことを想い起し」と叙述され、共和国で最初に撮影された第一標準像が張の背後に描かれて

いるが、整風運動以前、毛の権威は未確立であり、肖像も普及していなかったため、戦闘に際して張がこのように毛沢東を想起することはなく、その顔を思い浮かべることもできなかったはずである<sup>(52)</sup>。同様に張著において、復員した張が「ここに共産党、八路軍がいて、毛主席がわしらを指導してくれさえれば、どんな困難も恐くない。日々の生活は彼が指揮しているから、わしらは絶対に困難に会うことがない」と母を説得する場面についても(17)、延安整風運動が開始されて間もないこの時期に、前線の一復員兵が毛沢東に言及することは考えにくい。

羨智編著において、冀晋軍区生産会前後には、張の家に毛沢東像が掲げられている。『晋察冀日報』の冀晋軍区生産会に関する報道では、毛沢東像に関する言及はないが、羨智編著の描写は、日中戦争末期から国共内戦期の前線の根拠地において、毛沢東像が急速に模範の顕彰を通じて普及した状況に符合している。ただし、共和国成立以前の肖像も全て共和国第一標準像になっており、この時期に農村に普及した正面像の標準像ではない。この他、北京での毛沢東との面会の場面はもちろんのこと、1949年の早魃の際に奨旗と毛沢東像を見て、「団結すれば力は大い、どんな困難に勝てる」(71)と奮い立ち、合作社運動では「党は私の母親」だと言って、毛を思い出し、手紙を書く(105)など、毛への崇敬の念が折りに触れて強調されている。連環画の形式が肖像などの象徴を強調しやすいこともあるが、党組織よりも指導者個人への崇敬の念の方が、連環画の読者にとってより受け入れやすいという事情もあると考えられる。

### 【張樹義の肖像と写真】

張樹義の肖像画は、辛著で周令釗画として初めて現れる。周令釗は開国大典の際に天安門広場に掲げられた毛沢東像などを描いた著名な画家である<sup>(53)</sup>。また、毛ら指導者との謁見に際して徐悲鴻が彼の肖像を描き(『老区』177)<sup>(54)</sup>、10月15日には宣伝画「開国大典」の作者董希文による張の肖像が『人民日報』に掲げられており、著名な芸術家を何度も動員して、張に高い権威を与えようとしたことが理解できる。その後は、秘書処編の表紙と朱編著の1頁にそれぞれ異なる肖像写真が掲載されている。報道写真としては、『光明日報』が代表者会議の主席団席に座る張樹義の姿を掲載している(GR50.9.29)。

なお、秘書処編には山上で跪いて耕作する張樹義の姿を映した写真が掲載されている(写真1)。不屈の意思で働く張の姿を示す格好の材料として掲載されたものと考えられるが、不鮮明な写真は魅力を欠き、かえって貧困や悲惨さがリアルに強調されることになったためか、その後の伝記にこの写真が採用されることはなかった。羨智編著の描く力強い挿絵と比較すると、プロパガンダの効果の差は一目瞭然であろう(図1)。リアルな肢体を示す



写真1 耕作する張樹義（部分 秘書編 3）

「彼は苦しみながら山上で跪き、一鋤ずつ荒地を開墾している。」というキャプションがついている。



図1 耕作する張樹義（羨智編 41）

写真は戦争の不条理や悲惨さを映し出してしまい、栄誉軍人のプロパガンダに使用するには難しい事情もあったとも考えられ、羨智編著以後の3編の伝記においては肖像を含めて写真が使われることはなく、挿絵のみが使用されている。

#### 4 党組織

辛著から一貫して、張樹義の負傷は党の任務を全うするための結果として描かれているが、孟著以前の一連の伝記は党組織にほとんど触れておらず、主に八路軍と民兵の活動を描写している。それに対して、階級闘争を主題とする孟著では、長工仲間の党員幹部が張樹義を啓発し（14～17）、党部が張の成長を支え（25, 33～34）、党の指導の下、農会が組織され、減租減息が実施されて、抗日民主政権が建設されるなど（42）、党組織について一貫して具体的な記載がある。復員後、人民に奉仕できないことを嘆く張に対して、支部書記は「歩けるようになるのが任務」であると指示して、張を励ます（42～43）。村支部書記らが参軍すると、張樹義は支部書記として生産を組織する（49～50）。日中戦争で3人の党員が犠牲になったとされるが（75）、『靈寿县志』に記載された山門口村の烈士は、張の甥の張金山ら9人の兵士の他は、党員は尹玉田村長のみである（801～802）。改革開放後の張・董著（99）は、孟著と同様に支部書記らが参軍すると張が支部書記として生産を組織したとしているが、改革開放後の他の伝記では張の入党以外に党組織に関する言及はない。共和国成立初期、河北省の農村党員数は全国農村党員数の2割近くを占め、人数も最も多い省であったが<sup>(55)</sup>、抗戦時期の靈寿县における党の活動はさほど活発ではなく、孟著は共和国時期の中共の原則的な立場から党の役割を強調したものと考えられる。

#### 5 無人区での闘争

辛著やこれを踏襲した秘書処編・朱編著では日本軍のトーチカ建設後、張は「動くことが不便で逃げず」、張の一家は他村に避難し、兄嫁が絶えず食料と水を届けていたとする。2年後に、地方部隊の通訊員に発見され、以後民兵を指揮して地雷を埋め、日本兵3人、漢奸2人、犬と馬を殺した他、遊撃隊員を派遣して敵を偵察したとされる。羨智編著では、「山に逃れて、対敵闘争を準備した」（46）と叙述され、張著では、敵と闘争するため家族を大夫荘に送り、自身は小文山に戻ったとされる。食料はやはり兄嫁が運んでいる。敵の動きを偵察する中、偵察員に発見され、地雷戦を指揮するようになった（23～35）。

孟著では遊撃隊の活動がより活発に描かれ、これと協力した張の活躍も華々しく描かれる。張は自ら村に留まることを村民に説得し、堅壁清野（略奪に対抗して一切の物資を退避させる作戦）を指揮して、民衆を避難させ、遊撃隊と連絡を取っている。その後、洞窟に潜み遊撃隊と再会し、兄嫁でなく遊撃隊が米粉を運び、遊撃隊の協力の下、日本兵3人と漢奸1人を地雷戦でなく狙撃して殺している。また、敵トーチカに潜入して、敵の梁前溝襲撃の情報を察知し、遊撃隊が日本軍を殲滅し、張も日本兵数名を殺している（54～69）。朱編著までが消極的な残留であるのに対して、張著、孟著では積極的に残留を選択し

た上で、民衆を避難させ、抵抗を組織するという健常者以上の活躍を示している。改革開放後、地元刊行の伝記は無人区残留と地雷戦の指揮を伝える朱編著までの形に戻っている。全国向けの英雄伝である魯編著は、無人区闘争自体には触れず、負傷後については労働模範としての業績を讃えるのみになっている（214）。このような形式は、百度百科やウィキペディア中国語版といったネット上の略伝も同様で<sup>(56)</sup>、根拠地での地雷戦のような「地味な」活動は、全国レベルの英雄の事績にはふさわしくないということなのかもしれない。そのような背景があるためか、無人区の闘争を描く全国向けの伝記（黄等編著：549～550、劉・張編著：1207）は、孟著の叙述を踏襲してことさら超人的な活躍を伝えるというもう一方の極端に振れている。

## 6 家族の描写とその絆

上述のように、張著以前は家族の描写は極めて少なく、父母兄弟については言及がない。辛著の冒頭では家族が11人いたことになっているが、その後は甥二人とともに民兵を経て従軍したこと、無人区での生活中に兄嫁が食糧を届けたこと、土地改革後、甥が抜工隊に加入したこと、北京への出発の際、兄嫁が家のことは心配するなど声をかけたことのみが、朱編著までの伝記と報道（RR50.9.23）で確認でき、ある時点で彼が直系の家族を失っていることが推察できる。張著では、張の家には、父母、兄、兄嫁と甥2人、姪2人がいて、父と兄は八路軍の到着前に死亡し、母と兄嫁家族ら計7人の生活を張1人で面倒をみることとなったこと、張の復員後、母が死亡したことなどが確認できる（18～22）。この状況からみれば、張と甥にとって、入隊が生きるための積極的な選択肢になりえたことも推察できる。

階級闘争を主題とする孟著のもう一つの主題は、中国人一般の最も重視する感情としての「家族の絆」である。張樹義は家族に対する地主の圧迫、父と兄の死に対する復讐の念によって階級意識を育むことになり、父は地主への復讐を彼に託し、母も復讐の成功を望んだ。張著では、父と兄は東岔頭での小作生活の中で死んだとされ、詳細は描かれていないが、孟著では父は周老勤からの逃亡生活の中で死に、兄は周に殺されたことになっており（7～9, 13）、地主が直接的な加害者となっている。母は土地改革の時期まで健在で、復讐の念に燃える息子を一貫して支持し、土地改革において息子と共に復讐を果たす（9～13, 17, 95～100）。復讐に至るまでの母子間の感情が細やかに描かれ、読者の感情に訴えている。階級敵の打倒は父母の願いでもあり、父母への孝養という社会通念・道徳規範と階級意識が一致した形で提示されている。農業集団化運動においては、烈士家族、軍人家族を栄誉軍人、復員軍人とともに一括して革命の模範、大衆動員の重点的対象とする党の方

針が貫徹しており、集団化によって家庭の機能が生産隊に代替されていく中で、むしろ家族の情が動員に利用されていた。階級闘争を家族の情によって説明する孟著はこのような状況を背景に成立したものと考えられる。

## お わ り に

---

1946年、国共両党の停戦が実現した後の冀晋区生産会において現れた張樹義の報道では、指導者らが張の身体を気遣う姿勢が描かれ、榮譽軍人の生活への配慮が強調される一方で、これを機に展開された「張樹義に学ぶ」運動は、共和国成立初期における復員軍人を動員した生産運動を先取りするものであった。共和国成立後の報道・伝記は、張の全国工農兵労働模範代表会議への参加を機に現れ、身体への配慮の眼差しが消え、自己犠牲のみが強調されるようになる。その後も、戦後の生産運動、農業集団化運動、朝鮮戦争への貢献が模範の事績に加えられていく。これらは、復員工作の開始と朝鮮戦争を背景とした戦時動員体制再編の状況を反映したものであったと考えられる。停戦後に刊行された伝記では、指導者による張の身体への配慮が当時の報道に即して復活し、現実味のある内面描写もなされている。大躍進期の伝記では、主題が党の指導による地主との階級闘争へと大きく転換され、家族の絆がもう一つの重要な主題として描かれていた。改革開放後に復活する略伝は、おおおよそ1950年代初期のものに戻るが、農業集団化に関する事蹟が削除された一方で、大躍進期の伝記で生まれた超人的な活躍の叙述をそのまま受け継ぐものも散見される。

最後に張樹義の伝記と共和国における榮譽軍人の身体の位置づけを、日本の傷痍軍人の「再起奉公」の「美談」などと比較して、その特徴を確認したい。

近代国民国家における軍人の身体は男性性を象徴するものであり、心身に障害を負った傷痍軍人は、男性性を毀損されたものとして捉えられた<sup>(57)</sup>。失われた男性性を回復すべく、戦時日本では「再起奉公」が、ドイツでは「労働による自立」が求められ<sup>(58)</sup>、人民解放軍の榮譽軍人には「更なる栄光を勝ち取る」ことが求められた<sup>(59)</sup>。戦時日本では戦病者・精神病者を含む傷痍軍人の中で、特に戦傷者が視覚化され顕彰された<sup>(60)</sup>。一方、中共軍の榮譽軍人・残廢軍人に対する一連の補償規定は、その他の公務による負傷よりも戦闘による負傷について補償を手厚くしている点では日本の規定と共通するが、原則として身体障害のみを対象としており、傷の治癒後に精神障害のある者が等級最下位の三等乙級と認定された以外<sup>(61)</sup>、他の精神障害者は排除され、戦病者への優待措置は別途に講じられた<sup>(62)</sup>。その意味で中共軍の榮譽軍人の表象は、より戦傷者と強く結びつけられていたといえる<sup>(63)</sup>。

重度の障害を負いながらも、党と人民の革命事業に奉仕を続ける栄誉軍人張樹義は、その最も極端な例の一つとして早くから注目を浴び全国的に顕彰された。自己犠牲の故に模範となり、模範であるが故に更に自己犠牲を求められる「犠牲と模範の構造」は、健常者を含めた模範の物語を読む者を新たな模範にすることで再生産されていった。

戦時日本の傷痍軍人の「再起奉公」の物語では、傷痍軍人が国家の求める規範からまれに「逸脱」する場面や心理的な葛藤も描かれ、そこに恋愛や妻などの女性の要素も絡み<sup>(64)</sup>、物語に深みを与えている。中共が理想的な模範の物語としたソ連の『鋼鉄是怎样鍊成的』においても、主人公のパーベルの成長と葛藤、挫折、恋愛と革命の任務との矛盾などが描かれており、中国の若い読者の関心を引いていた<sup>(65)</sup>。これに対して、中共の栄誉軍人の伝記・物語では、障害を負った絶望感は比較的早く党の指導によって克服され、「逸脱」やそれに関わる恋愛などの女性の要素は皆無であり、まれに登場する女性は、労働模範の婚約者や栄誉軍人を支えて女性労働を組織する模範的な妻である<sup>(66)</sup>。孟著が描く張樹義の葛藤は、地主に対する復讐を早く成し遂げたいとする張の焦りと抗日を目的とする党の方針との矛盾であったり、障害を負って人民に奉仕できないことへの嘆きであり(22～23, 42～43)、常に「前向き」な葛藤である。このような模範像は、余敏玲が指摘する、成長の過程が短いか、存在しない「新中国」の「新人」の表象と一致する<sup>(67)</sup>。

重度の障害を負っても屈せず、引き続き革命事業に奉仕する栄誉軍人らの超人的な身体と精神は、女性性の拒絶の上に男性の強靱な身体の回復を国家・民族の生存の問題として提示するコロニアル・マスキュリニティ(植民地的男性性)<sup>(68)</sup>の究極の形態と見ることもできよう。

ただし、その一方で1946年の冀晋区生産会において張樹義が奉仕の対象として言及した烈士・軍人の家族らが、1950年代初めからの復員工作と同時進行で生産に組織されていき、栄誉軍人と同様、自助努力と奉仕の主体への転換が求められるようになっていたことには注意が必要である。農業集団化の中でもその模範的役割が期待される中、自己犠牲の故に模範となり、模範であるが故に更に自己犠牲を求められるという「犠牲と模範の構造」は烈士・軍人家族へと拡大されていった<sup>(69)</sup>。高齢者、母子家庭を比較的多く含むこれらの世帯の労働力の組織化は、栄誉軍人の身体の組織化とともに、むしろあらゆる身体の男性化を目指すものであったというべきかもしれない。

このことに関して、1950年の全国工農兵労働模範代表会議を改めて振り返るならば、張樹義とともに全国労働模範に選ばれた労働者に趙桂蘭という女性がいる。山東省の工場労働者である趙は、身を挺して工場を爆発から守り左腕を失ったことで「共産党のよき娘」と讃えられ、1950年6月、全国政治協商会議第二次会議の歓迎の宴で毛沢東ら中央幹部と

面会している (RR50.6.28)。全国工農兵労働模範代表会議においても、趙は張と並んでその自己犠牲の精神が称えられた (RR50.9.29, GM50.10.25)。全ての身体を男性化して組織する共和国の権力の志向性は、この時既に明示されていたのである。

## 註

- (1) 深町英夫『身体を躰ける政治 中国国民党の新生活運動』岩波書店、257頁。
- (2) 山之内靖「方法的序論—総力戦とシステム統合」、山之内靖・ヴィクター・コシュマン・成田龍一編『総力戦と現代』柏書房、1995年。
- (3) 市川遥「大衆作家たちの「潤色執筆」」『昭和文学研究』第83号、2021年、北村陽子『戦争障害者の社会史 20世紀ドイツの経験と福祉国家』名古屋大学出版会、2021年。
- (4) 深町前掲書、257～259頁。
- (5) 丸田孝志「人民に奉仕する身体—中華人民共和国成立前夜の華東榮譽軍人学校における兵士の生活—」、笹川裕史編『現地資料が語る基層社会像—20世紀中葉東アジアの戦争と戦後—』汲古書院、2020年。
- (6) 烈士家族、現役軍人家族、榮譽軍人を含む復員軍人の救済と生産動員の過程で、これらの人々を同等に扱う配慮が、その背景にあったと考えられる。丸田孝志「中華人民共和国成立初期の兵役・革命関係者と農業集団化運動」『史学研究』第315号、2023年。
- (7) この時期、農民の模範は一般に「労働英雄」と称されており、「労働模範」は主に共和国成立後に使用される語であるが、靈寿县老区建設促進委員会・『靈寿县革命老区發展史』編集委員会編『靈寿县革命老区發展史』河北人民出版社、2019年、133頁の叙述に従った。原史料は確認できない。
- (8) 郎鵬鵬「晋察冀抗日根拠地優撫制度研究」河北師範大学碩士論文、2008年、19頁。
- (9) 「晋察冀辺区撫恤殘廢軍人辦法」(1940年9月)、魏宏運主編『抗日戦争時期晋察冀辺区財政經濟史資料選編』(以下、『財政經濟史資料』) 財政金融編、南開大学出版社、1984年、573～574頁。国民政府統治地区における榮譽軍人の救済事業については、深町前掲書、李常宝著『抗戦時期正面戦場榮譽軍人研究』人民日報出版社、2014年を参照。また、北京政府時期を含む中華民国時期の榮譽軍人救済事業を通観した研究に、王安「民国时期殘疾軍人社会保障研究」蘇州大学博士論文がある。なお、国民政府統治地区では、抗戦の早い時期から教養院(重度の榮譽軍人のための保養施設)の開設、全国的な支援運動などが行われており、都市に依拠して正面戦場を担い、全国政權の担当者として制度を整えようとしていた国民政府が、辺鄙な農村に依拠してゲリラ戦を展開する中共政權に比べて、大規模かつ充実した救済事業を展開できたことは、言を俟たない。
- (10) 郎鵬鵬前掲論文、29頁。
- (11) 「晋察冀辺区榮譽軍人撫恤辦法」(1942年6月)『財政經濟史資料』財政金融編、578～584頁。
- (12) 郎鵬鵬前掲論文、29～30頁。
- (13) 「晋察冀辺区撫恤殘廢軍人辦法」、573頁、「晋察冀辺区榮譽軍人撫恤辦法」、580頁。
- (14) 宋劭文「論合理負担、県地方款、預決算制度」(1940年2月)『財政經濟史資料』財政金融編、20頁。

- (15) 「栄軍的旗幟」、張克夫『英雄的老人』、東北人民出版社、1954年、16～17頁。
- (16) 中共靈寿县党委党史資料徵集辦公室編『靈寿先驅』法律出版社、1985年、35頁。
- (17) 「戦闘英雄康福山 趙旗歌」、中共行唐县委党史研究室編『行唐党史資料』第2輯、奥付なし、449頁。
- (18) 中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央檔案館『中国共産党組織資料』第四卷（上）、全国解放戦争時期（1945.8-1949.10）、中共党史出版社、2000年、517、518頁によれば、王政治委員は王平、韓専員は韓一鈞である。王昭は冀晋区党委副書記で、王平は冀晋区党委書記でもある（同上512頁）。
- (19) 丸田前掲論文、2023年。
- (20) 冀中区行署「冀中区財政状況」（1945年9月）『財政經濟史資料』財政金融編、87、91～92頁。
- (21) 『河北日報』の閲覧については、河野正氏に多大な便宜を図っていただいた。深く謝意を表す。
- (22) 宋劭文「華北臨時人民代表大会上の政府工作報告」（1948年8月9日）、中央檔案館・河北省社会科学院・中共河北省党史研究室編『晋察冀解放区歴史文献選編』（1945-1949）中央檔案出版社、477頁。
- (23) 史静・鄭鵬「1947-1952年“工農兵叢書”研究」『中国現代文学研究叢刊』2008年第6期。朱汎甫については、著書に『中共抗戰史講話』光華書店、1948年が確認できる。広益書局は、清末に創設された上海の民間書店で、1949年以降、その出版業務は四聯出版社に編入され、発行業務は上海図書發行会社に編入された。「広益書局」、中国大百科全書第三版網絡版、<https://www.zgbk.com/ecph/words?SiteID=1&ID=71457&Type=bkzyb&SubID=60674>（2023年4月17日最終閲覧）。
- (24) 中央復員委員会巡視組対復員工作檢查情况綜合彙報（1950年12月）、中央轉業建設委員会編『中国人民解放军復員工作文件彙編』第1輯（以下、『復員工作文件』1のように略）、1958年、127頁。
- (25) 军委総政治部关于部隊整編復員的政治指示（1950年7月7日）『復員工作文件』1、8頁。
- (26) 丸田前掲論文、2023年。
- (27) 聶大朋「河北省軍区第一批回鄉轉業人員的教育工作」『八一雜誌』第13卷、1952年5月、26頁。
- (28) 「革命殘廢軍人優待撫恤暫行条例」（1950年12月11日）中華人民共和国内務部辦公庁編印『民政法令彙編』（以下、『民政法令』）（1949.10-1954.9）、396～403頁。
- (29) 中央人民政府人民革命軍事委員会・中央人民政府政務院「關於處理部隊中老弱殘疾人員的指示」（1951年4月24日）『八一雜誌』第4卷、1951年6月、26頁。1956年4月の内務部・衛生部・総政治部・総後勤部「關於部隊因傷病致殘人員年老病弱人員的處理原則和轉入革命殘廢軍人教養院的規定的聯合通知」（1956年4月26日）『復員工作文件』2、1958年、192頁では、「帰る家がなく、扶養する人がおらず、労働力を喪失した二等甲級革命殘廢軍人」もまた教養院に収容できるようになっている。
- (30) 「中央復員委員会轉發西南復員委員会關於作好復員安置工作的通報」（1951年8月20日）『復員工作文件』1、213頁。
- (31) 中央轉業建設委員会「關於志願軍傷病員及榮校榮院暫不棄理回鄉轉業建設工作的指示」（1951年8月20日）『復員工作文件』1、213頁。
- (32) 中華人民共和国内務部「復員建設軍人安置暫行辦法」（1954年10月23日）『八一雜誌』第

- 69巻、1954年12月、8頁。
- (33) 謝覺哉「關於召開全國烈屬、軍屬、革命殘廢軍人享受優待勞動日工作中的幾個問題的報告」(1956年9月11日)『民政法令』(1956年)、87頁。
- (34) 『中共中央文件選編』第14卷、379頁。
- (35) 陳毅「在第三次全國民政會議上的報告」(1954年12月9日)『民政法令』(1954年)、10頁。
- (36) 傅秋濤「秘書長贖于1952年回鄉轉業建設工作的總結報告」(1952年12月28日)『復員工作文件』1、148頁。
- (37) 「貫徹黨的社會主義建設總路線推動民政工作全面大躍進」(1958年6月18日、第4次全國民政會議上的總結報告)『民政法令』(1958年)、1959年、40頁。
- (38) 馬石生「春蚕到死糸方尽 俯首甘為孺子牛—訪全國著名連環畫脚本作家尚羨智先生」連芸網、<http://www.lhhart.com/personage/mjft/mjfttxt.php?im=zjmj&nam=chunca>、2022年9月15日最終アクセス。
- (39) 共和國成立初期、民衆への思想宣伝において娯楽が重視され、連環画もその一つとして改造が進められたことについては、武田雅哉『中国の漫画〈連環画〉の世界』平凡社、2017年、117～127頁を参照。
- (40) 耿殿龍「抗戰時期晋察冀辺区詩歌運動情況概述」『中北大学学報』(社会科学版)第29卷第2期、2013年。
- (41) 「孟敏(現代作家)」百度百科、<https://baike.baidu.com/item/%E5%AD%9F%E6%95%8F/9072404>、2022年9月15日最終アクセス。
- (42) 余敏玲『形塑「新人」:中共宣伝与蘇聯經驗』中央研究院近代史研究所、2015年、299頁。
- (43) 靈寿县地方史編纂委員會編『靈寿县志』新華出版社、1993年、153頁。夏と秋の7種の糧食の平均値。許道夫編『中国近代農業生産及貿易統計資料』上海人民出版社、1983年、16頁によれば、河北省の粟の畝当たり生産量は1936年に203斤で、1937年に138斤に減少した後、1947年に182斤に回復している。他の糧食もおおよそこのような傾向をたどっており、1949年の生産量をもって日中戦争前の生産量を推定することはおおよそ妥当であると考えられる(この資料は松村史穂氏にご教示をいただいた。深く謝意を表す)。重量の容量への換算は、「1942年太岳区上半年財糧工作總結」(1942年6月)『抗日戦争時期晋冀魯豫辺区財政經濟資料選編』第1輯、財政經濟出版社、1990年、686頁の附表四に記載された粟斤数の容量換算結果を基に、1斤=0.74升として計算。
- (44) 「晋察冀辺区徵收救国公糧条例」(1939年9月)『財政經濟史資料』財政金融編、180頁の救国公糧徵收の最低基準が1人当たりの年間総収入1石5斗とされていることによる。
- (45) 柏祐賢『北支の農村經濟社会』弘文堂、1944年、51～62頁。
- (46) 冀中区行署「關於冀中区人民負担問題」(1943年6月)『財政經濟史資料』財政金融編、398頁における冀中区5県中農49人の平均総収入5.3石を基にしている。
- (47) 余敏玲前掲書、275～276頁。
- (48) 武田前掲書、90～91、159～161頁。
- (49) 余敏玲前掲書、52～53頁。
- (50) 余敏玲前掲書、52～65頁。
- (51) 李耐因「向保爾學習的一姚傑同志」、華東軍区榮軍総校政治部編『榮軍模範事迹選』、1948年、3～6頁、「無脚的托拉機手—李來財」、中国人民解放軍瀋陽軍区編印『復員軍人的光榮任務』、1956年、77～82頁。
- (52) 共和國第一標準像については、楊昊成『毛沢東圖像研究』時代國際出版有限公司、2009

- 年、65～66頁を、中共根拠地における毛沢東像の普及過程については、丸田孝志『革命の儀礼—中国共産党根拠地の政治動員と民俗—』汲古書院、2013年、第5章を参照。
- (53) 周が天安門広場に掲げられた毛沢東像を制作した経緯については、楊昊成『毛沢東図像研究』時代国際出版有限公司、2009年、55～57頁を参照。
- (54) 徐悲鴻が描いた肖像は、『老区』（176）と『先駆』（32-33の間）に掲載されている。
- (55) 1955年の河北省の農村党員は約102万6,000人で全国農村党員の18.5%を占めていた。中共中央組織信息中心『中国共産党党内統計資料彙編』党建読物出版社、2001年、7頁。
- (56) 「張樹義（戦闘英雄）」百度百科、<https://baike.baidu.com/item/%E5%BC%A0%E6%A0%91%E4%B9%89/62429170>、「張樹義」維基百科、<https://zh.wikipedia.org/zh-hans/%E5%BC%A0%E6%A0%91%E4%B9%89>、2023年3月7日最終アクセス。
- (57) 弓削尚子『はじめての西洋人ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで』山川出版社、2021年、224～237頁、北村前掲書、114～118頁。なお、現代世界において戦争・軍隊・軍事に関わり構築される男性性（ミリタリー・マスキュリニティーズ [軍事的男性性]）の問題については、佐藤文香『女性兵士という難題 ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』慶應義塾大学出版会、2023年、第二章、第三章を参照。
- (58) 市川遥前掲論文、北村前掲書。
- (59) 1951年に南方老革命根拠地訪問団が組織された際に、毛沢東の題詞として旧根拠地に贈られた言葉で（謝覚哉「南方老根拠地訪問団工作報告」（1951年12月14日）、『民政法令』（1956年）、426頁）、その後、烈士・軍人家族、復員軍人らの活動などにおいて広く使用されている。
- (60) 松田英里「戦傷／戦病の差異に見る「傷痕軍人」、吉田裕編『戦争と軍隊の政治社会史』大月書店、2021年。
- (61) 松田同上論文、「革命残廢軍人優待撫恤暫行条例」、399頁。
- (62) 国民政府の傷痕軍人に対する規定は、1927年の傷痕軍人補償制度の発足以来、傷の治癒後に重大な精神障害の残る者を最下位の等級に置き、戦病者を傷痕軍人の範疇に入れない点（王安前掲論文、51～56頁）において基本的に中共と同様であり、中共の規定は国民政府からの継承関係にあることが伺える。
- (63) なお、1950年代の中共軍において、退役者に対する一般的な恩給は生産資助金という名目で等級と服役年数に応じて一時金が支給されたのみで、経常的な支給は行われなかった。「復員建設軍人資助金計算査数表」『復員工作文件』1、346頁。
- (64) 市川遥「「傷」を描くということ：一九四〇年前後の軍人援護強化キャンペーンと傷痕軍人表象をめぐる」『名古屋大学人文学フォーラム』第5号、2022年。
- (65) 余敏玲前掲書、77～78頁。
- (66) 「看個好日子」、張克夫『英雄的老人』東北人民出版社、1954年、1～14頁、「忘我労働的栄誉軍人張宝栄同志」『充滿革命樂觀精神的人』、68頁。
- (67) 余前掲書、343～345頁。ただし、共和国の模範女工の物語においては、若干の逸脱と葛藤（生産品不具合の申告を巡る動揺）も描かれており、ここにも堅固な男性性に対置する形で脆弱な女性性が提示されているともいえる。田村容子「栄誉と秘密—「女工連環画」にみる内面の描写—」『連環画研究』第3号、2014年。
- (68) 高嶋航「「東亜病夫」とスポーツ—コロニアル・マスキュリニティの視点から」『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年。
- (69) 丸田前掲論文、2023年。